

本よみつくり塾

書・榊 莫山



本の値段は税抜きです

人はみな、生きた時代や場所も、置かれた境遇も、互いにまったく異なる。にもかかわらず、

大の人間の姿である。盲ろう者といえばヘレン・ケラーが有名であるが、彼女が物心つく前から音と光のない世界に生き、人生のある時期で世界や他者とのつながりを発見する「誕生」の物語を

現在の福島県の背後に感じ取った。評者自身が小児病棟で、小さな人生の先輩に多く出会ってきたことが影響しているのかもしれない。

本書を読みながら、おそろしく読者は、福島の子を想像しきれない自分と、にもかかわらず自らの人生を重ね合わせ、てしまう自分の両方を発見するだろう。本書は、互いに異なる私たちが、それでも物語を通じてつながりうる可能性を示している。

ビタミンBOOK



小児科医

熊谷 晋一郎

わらず、なぜ時に私たちは、自分と異なる他者の物語に自分を重ね、共通の寓意を読み取るのだろうか。

生井久美子著『ゆびさきの宇宙―福島智・盲ろうを生きて』(岩波書店)は、9歳で視力を、そして18歳で聴力を

物語を通じ他者となつながら

教育に従事し、同時に、大学という研究環境のバリアフリー改革でも重要な貢献をしている。そんなヒロイックな側面が取り沙汰されることの多い福島だが、本書で描かれているのは、悩み、落ち込み、絶望し、迷い、愛する、等身

はつながらの「喪失と回復」といえる。とりわけ評者は、人生の早い時期に絶大な愛、痛み、不安、喪失、そして死に触れ、深い断念と思索の時間で多くの時間を費やしたことで胚胎する「小児病棟の想像力」でもいづべきものを、